

# クレス オルデンバーグ



三苗夏家もぐもぐ

一九二九年二月二八日、クレス・オルデンバーグは、スウェーデンのストックホルムで、スウェーデンの外務官の父、ヨスタ・オルデンバーグ、オペラ歌手で、のちに抽象画家としても活動した母、シンブリッド・エリザベス、リンフォースのもとに生まれた。



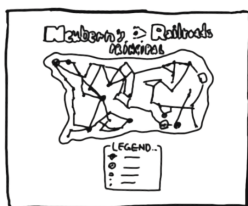
ストックホルム

一家は、ニューヨークやオスロを転々とし、一九三六年からシカゴで暮らした。

当時、英語を話せなかったクレスは弟のリチャードと空想の世界を作り、地図、グラフ、絵等々で詳細に記した。後の作品に登場する飛行機、旗や銃も描かれている。



カリン・リンフォース(オルデンバーグの叔母)によるスクラップブック、1934-1935年頃



《ノイベルン全海道系図》1938年  
架空の国ノイベルンは南大西洋に位置する...

スウェーデンにいる叔母から時々送られてくるスクラップブックには、雑誌の広告から切り取られた家具、家電、食品、衣料品がカラージュエリーで飾られていた。

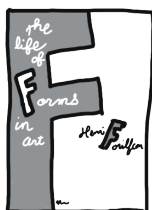
\* 弟のリチャード・エリック・オルデンバーグ(1933-2018年)は、1972年から1994年までニューヨーク近代美術館の館長を務めた。

男子校のラテン・スクール・オブ・シカゴに通い、演劇を始める。



『毒薬と老嬢』のアイン・スタイン博士を演じた。

イエール大学で文学と美術を専攻。



アンニ・フォション『形の生命』

大学卒業後、シカゴに戻り、シカゴ市報道局で見習い記者として警察を回り、街の話題を取材、都市との本格的な接触を初めて経験する。

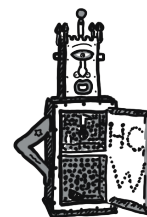
ポルトとナットの収集に人生を費やした男性の死を取材したことも。



一九五二年、シカゴ市報道局を辞め、書店、広告、代理店、駅で絵売り、イラストレーター等で生計を立てながら、シカゴ美術館附属美術大学に通い、ポール・ヴィガールト(八九七-一九六九年)のクラスに参加。ホレス・クリフォード・ウェスターマン(一九三二-一九八二年)らと学ぶ。



ポール・ヴィガールト  
《The anniversary (アニバーサリー)》  
制作年不明



ホレス・クリフォード・ウェスターマン  
《Memorial to the idea of man if he was an idea (もし人がアイデアであるなら、そのアイデアの記念碑)》  
1958年

一九五三年、初めての展覧会をロバート・アール・クラウ(インディアナ一九二八-二〇〇八年)らと行い、ネルソン・オルグレンの短編小説に想を得、路上の人物を描いた風刺画を出品。

新雑誌「シカゴ」のイラストとシカゴの前衛美術を牽引したジョージ・コーエン(一九一九-一九九九年)の小特集を担当。



「シカゴ」のイラスト



ジョージ・コーエン  
《Emblem for an unknown nation #1 (未知の国のエンブレム #1)》1954年

パティは、一九五〇年代後半から数多くのパティ・マンニヤ映画に出演した。



《Girl with furpiece (Portrait of Patti) (毛皮の袂を差した少女 (パティの肖像画))》1959-1960年

ミシガン州ソーガタックのオックスボー・絵画サマースクールに参加、油絵を学ぶ。初めての演劇作品を発表。後に『妻となるパティ・ミュニャ(パトリシア・ムンシンスキー、一九三五年)』と出会う(一九六〇年に結婚、一九七〇年まで)。

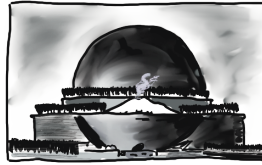
一九五三年、アメリカ市民権を取得。

\* 当時、シカゴでは、1951年のジャン・デュビュフの講演が反響を呼び、アール・ブリュットに関心が集まっていた。

一九五六年ニューヨークへ。  
クーパー・ユニオン 装飾芸術  
美術館図書館で働き  
ながら(一九六一年十一月  
まで)、作品制作を行う。



エディンズ・レイ・ブーレー (1928-  
1999年)、ジャン・ジャック・ルーク (1957-  
1926年) 等の建築計画に角せれる。



エディンズ・レイ・ブーレー  
《Newton's cenotaph  
(ニュートン記念堂)》1984年

同年五月、ニューヨークでの最初の個展をジャドソン画廊で  
開催。人物画を展示する計画だったが、紙や木材、ワイ  
ヤー等で作られた彫刻をドローイングや詩を組み合わせ  
て展示した。



ワイヤーと新聞紙  
を使用した張り子のマスク。

《Elephant mask  
(象のマスク)》1959年



身に付けられる。



《Lady (レディ)》1959年

コート掛けに廃木材が  
釘で打ち付けられている。



《レディ》に《象のマスク》  
を載せて展示した。

パティがモデルを務めた。



《Pat in Black Underwear,  
Seated (黒い下着で座るパット)》  
1959年

一九五九年二月、クーパー・ユ  
ニオン美術大学図書館で  
ドローイングを展示。同大学  
の学生だ、たマークス・ストラトリフ  
(一九三五年ニッポン)やトム・ウエッ  
セルマン(一九三一年)から、彼ら  
が始めたジャドソン記念教会  
地下のジャドソン画廊での展  
示への参加を持ちかけられる。

一九五九年、アラン・カプロー  
(一九三一年)の(ハフニング)の  
部分からなる十八のハフニング、  
レッド・ブルームス(一九三七年)  
の《ベニング・ビルディング》を  
見る。ブルームスの作品に感  
銘を寄せ、数回見る。



※ハフニングは、アラン・カプローが考案した偶然性を重視した行為からなる表現形式。

一九六一年十二月、ロウアー・イーストサイドに  
店舗を借り、レイガン製作所と名付け、作品  
の制作、展示、販売を行う《ストア》を展開。  
会期終了後、翌年二月より同所に四ヶ月間  
にわたり、パフォーマンス十作品を上演、オルデン  
バーグの他、パティやルカス・サマラス(一九三一年)  
などが出演した。

日用品や食品をワイヤーで作る形作り、  
エナメル塗料で色を混ぜずに彩色

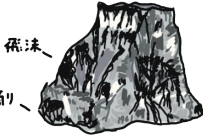


《Small yellow pie  
(小さな黄色いパイ)》1961年

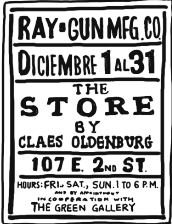


《Blue shirt, striped tie  
(青いシャツ、縞柄のネクタイ)》1961年

アクションペインティング  
// を見せせる筆触 //



《Cash register (レジ)》1961年



※レイガン(光線銃)は、SF作品に登場する空想上の武器。オルデンバーグは多数のレイガン  
を作り、路上でレイガンを見せせる形作りのものを見つけて収集した。

元は「ストア・デイズII」  
(1962年3月2,3日)  
の小道具



《Freighter and Sailboat  
(貨物船と帆船)》1962年

《糸の期月》



《Sausage  
(ソーセージ)》  
1957年

一九六二年九月、グリーン画廊  
の個展で初めて大きなソフト  
スカルプチュア(柔らかい彫刻)  
を発表。大きな話題を呼び、身  
の回りにあるものやイメージを題  
材にしていたことから、その後「ホッ  
プアート」を代表する作家とみな  
されるようになった。



《Floor burger (フロアバーガー)》  
1962年

円形、(土など)重ねる伝統的な彫刻の  
技法と異なり、中に詰めた物を入れ、内側から  
形を作る。また柔らかいので、形は流動的。

ソフト・スカルプチュアは、  
ハフニングの衣装や小道具  
具から生まれ、パティが  
縫製を担当した。取組  
期のものにストックキングに  
新聞紙を詰めた《ソーセ  
ージ》(一九五七年)がある。

《新聞紙を詰めた黄麻布のゴミ袋》



《Street head III (Profile with hat)  
(ストリート・ヘッドIII(帽子をかぶった横顔))》1960年



《Snapshots from the city  
(都市のストリップショット)》1960年

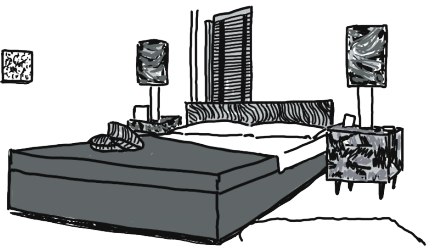
包帯のようなものを体に巻き付けて、ぐったりと  
床に座る「オルデンバーグ」

一九六〇年、ジャドソン画廊で、ジム・ダイン(一九三一年)と展示を行う。  
二人は、路上で収集したものをを用い、展示空間全体を作品化した環境  
芸術を制作し、オルデンバーグは《ストリート》、ダインは《ハウスマシ》として  
発表した。また展示空間内では、オルデンバーグの最初のハフニングが  
行われた。

※一九六二年十一月から十二月にかけシドニー・ジャニス画廊で開催された「ポップ・アート」のはじまりといわれる  
「ニュー・リアリズム」展に参加。展覧会タイトルは、一九六〇年代に主にフランスで活動した前衛芸術グループ「ヌ  
ヴェー・リアリズム」の英訳。同展には、同グループの指導的評論家ピエール・ルソー(一九三〇-二〇〇三)が関わっていた。

※環境芸術は、「ハフニング」の登場とともに、一九五〇年代後半から一九六〇年代にかけて  
使われるようになった。観者を耳寄り巻く環境自体を作品と考える。インスタレーション  
やアースワークと重なる点も多い。





《Bedroom ensemble (ベッドルーム・アンサンブル)》1964年

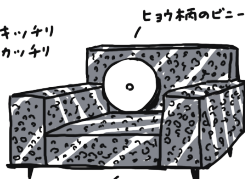
十月ロサンゼルス、ドゥアン画廊で《ヒョウ柄の椅子》、翌年一月、シドニー・ジャンニス画廊で、モーターの二室を再現した《ベッドルームアンサンブル》を発表。いずれも、業者に発注し制作された。両作品ともに二次元平面上の遠近法を見たまの形を三次元の椅子やベッドなどの家具に当てはめ、変形に歪曲させた形で示した。その後、「家」を題材にしたソフト・スカルプチュアが展開された。

《初のヒョウ柄を題材に》



ドゥアン画廊の個展のために制作されたポスター

《見る角度によって形が変わる》



底にメーカーのラベル 初めて業者に製作を依頼

《Leopard chair (ヒョウ柄の椅子)》1963年

一九六三年九月より約半年間カリフォルニア州ベニスに滞在し、大型作品の制作に取り組む。

《組み立て式のため、同じ形に再現することはできない。》



《Giant BLT (Bacon, Lettuce and Tomato sandwich) (巨大なBLT (ベーコン、レタス、トマトサンドイッチ))》1963年

《ソフト・スカルプチュアはよく人体の一部にたとえられる》



《Soft pay-telephone -ghost version (柔らかない公共電話-ゴーストバージョン)》1963年



《Soft pay-telephone (柔らかない公共電話)》1963年

米ビニールのソフト・スカルプチュアは、厚紙のハードバージョンから作り始め、パターンを引き、パティが系集習用にモスリンで白いゴーストバージョンを縫製した後、ビニールで作られた。

一九六三年、ビニールのソフトスカルプチュアの制作を始める。

一九六七年十月、メトロポリタン美術館の裏で、雇われた墓掘り人が矩形の穴を掘り埋め、戻す。フォーマンズを、行い、初めの、記念碑」を実現した。



《Placid civic monument (Hole...) (静かな市の記念碑(穴...))》1967年

《巨大ティディベア》



《Proposed colossal monument for central park north, New York City: Teddy Bear (セントラルパークの北の巨大な記念碑の提案、ニューヨーク市:ティディベア)》1965年

一九六五年より特定の場所を想定し、空想の記念碑を考案するシリーズを開始する。



アルマン



イヴ・クライン

イヴ・クライン(一九二一年)一九六二年)、アルマン(一九二一年)一九五五年)などのヌーヴォーレアリスムの作家やピエール・レスターと交流する。

五月より約半年間、ヨーロッパに滞在、パリのイリアナソナベント画廊で個展を開催、同地で制作した作品を出展した。

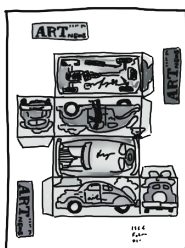
《パリで見かけた食べ物。》



《Oeufs "Vulcania" (卵「ヴォルカニア」)》1964年



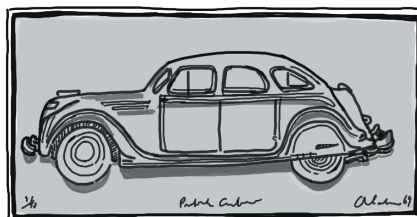
《Soft engine parts #1, Air flow model #6 (Radiator and fan) (柔らかなエンジン部品 #1, エアフローモデル #6 (ラジエーターとファン))》1965年



「Art News (アートニュース)」1966年2月号

一九六八年から一九六九年にかけてロサンゼルス版画工房、ジェミニ・ナイ・G.E.L.は、本作をきっかけに、立体作品の分野に進出し、工業的な素材や新しい技法を取り入れ、大規模なプロジェクトを手掛けるようになった。

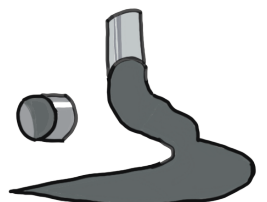
ハリウッドに突き通ったポリウレタンのレリーフ



《Profile Airflow (プロフィールエアフロー)》1969年  
プロフィールには、模範、輪郭などの意味もある。

エアフローは、一九六五年雑誌「アートニュース」の表紙のためのドローイングやソフト・スカルプチュアとして既に登場している。また一九六六年には、友人の作家ロバート・ブリア(一九二一年)の父で、エアフローの開発を主導したカール・ブリア(一九一一年)の年々を訪問し、実際のエアフローを取材している。

シドニー・ジャンニス画廊で開催された「マリリン・モンローへのオマージュ」展に、リック・ピンコット社に依頼し、制作した初めての金属作品を出展。リック・ピンコット社は一九六六年の設立以来、オルデンバーグを含む数多くの作家と周知を制作している。



《Lipstick with stroke attached (リップスティック)》1967年

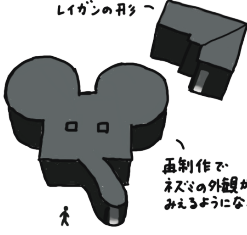
現在はワール立川に設置されている。

米マルチプルは、工業的過程を経て作られる量産型の作品。一九五五年にジャン・ティンダリー(一九二五年-一九九一年)とヤコブ・アガム(一九二八年-)が発案し、一九六二年にドゥアン画廊から発売された。オルデンバーグは、一九六五年にマルチプル作品《Baked potato (バイクドポテト)》と《Tea bag (ティーバッグ)》を制作している。



「マウス・ミュージアム」内部

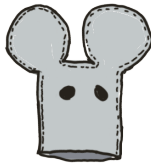
レイガン・ウィング



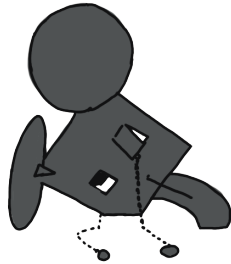
高制作で  
ネズミの外観が  
見えるようになった

左 「Mouse museum (マウス・ミュージアム)」  
1965/1977年  
右 「Ray gun wing (レイガン・ウィング)」 1977年

一九七二年、ドイツ、カッセルの「ドクメンタ5」で、キュレーター、美術史家のカスパー・ケーニヒ（カスパー）と共に「幾何学的なネズミ」の形をした美術館「マウス・ミュージアム」を制作、内部には長年収集してきた小物、制作過程を生きた断片や制作などを展示した。また、一九七七年の「マウス・ミュージアム」再制作に際して、新たにレイガン・ウィングのコレクションを展示するための「レイガン・ウィング」が作られた。



「Moveyhouse (ムービーハウス)」  
1965年のマスク



「Geometric mouse, Scale A  
(幾何学的なネズミ、スケールA) 1969

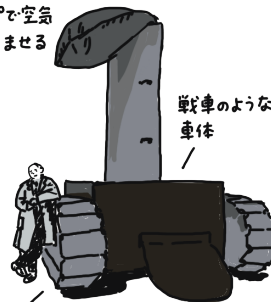
「幾何学的なネズミ」は、一九六五年の「パフォーマンスムービーハウス」に参加者が被ったマスクにその始まりを見ることができ、円と四角からなる形は映写機の形に由来する。一九六九年には、彫刻作品「幾何学的なマウス」の原型を制作。最終的に、リップ・コット社により複製の大きさと色で作られた。

※「幾何学的なマウス」の原型は、引越したばかりのコネカット州ニューヘヴンのスタジオで制作された。建物の入口には「ネズミの家へようこそ」と書かれており、実際にネズミがたくさん出たという。スタジオは、フェミニズム・アートで知られるハンナ・ウィルク（1940-1993年）と共同で使用した。

1969

ビニール製の口紅は、手押しポンプで空気をいれて膨らませる予定だった。

想定より短くなってしまった口紅

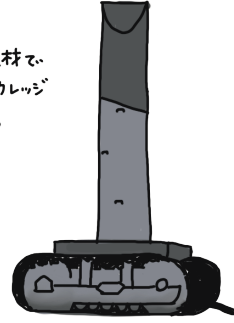


戦車のような車体

資金不足により合板で作られた履帯

1974

耐久性のある素材で修復され、モスクレージに移設された。



「Lipstick (ascending) on caterpillar tracks  
(キャタピラー上の上昇するリップスティック)」1969-74年

一九六八年、イェール大学で建築を学ぶスチュアート・レーベ（一九四四年）を中心とした学生グループからの依頼により、目取初の実現可能な記念碑「トラクターの上の上昇するリップスティック」を、リップ・コット社の協力のもと制作。作品は学生たちの手によって大学キャンパスの中心にある広場まで運ばれ、戦没者記念碑の真正面に設置された。

「生きているように重く」



「Giant ice bag scale A (巨大なアイスバッグスケールA)」1970年  
ロサンゼルス・カウンティ美術館の「アートヒテラロジープログラム」で、ジェミナG.E.L.と共同制作された。

一九七〇年大阪万博のアメリカ館に巨大なアイスバッグを出。

一九六九年ニューヨーク近代美術館にて最初の総合的な個展を開催。アムステルダム市立美術館やテートギャラリーなど世界各地を巡回した。

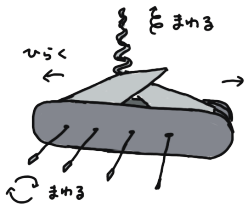


二〇二二年七月八日、ニューヨーク市内の自宅兼スタジオでなくなる。



「Dropped Bouquet (落下した花束)」2021年

1985年にヴェネチアで行われたパフォーマンスで使用された。

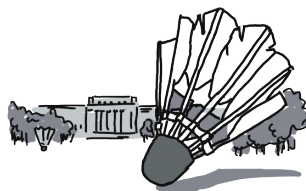


「Knife ship I (ナイフシップI)」  
1985年

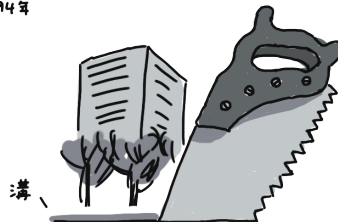


「Binoculars (双眼鏡)」  
1991年

建築家フランク・ゲーリー（一九一九〜）との共同制作。



「Shuttlecocks (シャトルコックス)」  
1994年



「Saw, Sawing (切っている鋸)」1995年



「Trowel (こてい)」1971年

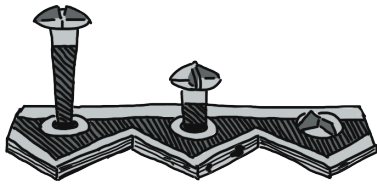


東京ビッグサイトに設置。鋸の歯の形は、建物の三角形と呼吸しているようにもみえる。

一九七七年、キュレーターで美術史家のコーシャ・ヴァン・ブリュッケン（一九四二〜二〇〇九年）と結婚。以降、コーシャとともに三〇年以上にわたって、世界中で四〇を超える大規模な公共プロジェクトを実現した。

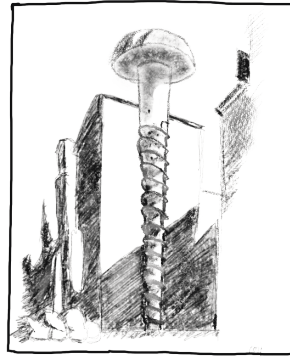
※コーシャとの共同制作は、1976年オランダのオッテルロールにあるクレア・ミュー美術館での彫刻作品「こてい」の設置から始まった。1981年以降作品にコーシャのサインが入るようになった。





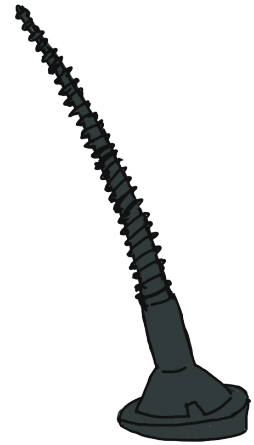
《Rising and falling screw (上下するスクリュー)》1969年

ロサンゼルス・カウンティ美術館の「アート&テクノロジー」プログラムの一環として上下するスクリューを考案。厚紙などで原型を制作したが、実現せず。



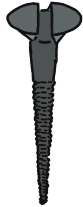
《Cemetery in the shape of a screw: skyscraper for São Paulo, Brazil (スクリュー形基地: ブラジル、サンパウロのための超高層ビル)》1971年

サンパウロでは、高層基地の計画が進められているという新聞記事を読み、スクリューの形をした基地を考案。基地は、スクリューの頭が地上に残るまで、埋まりながらゆっくり下降する。



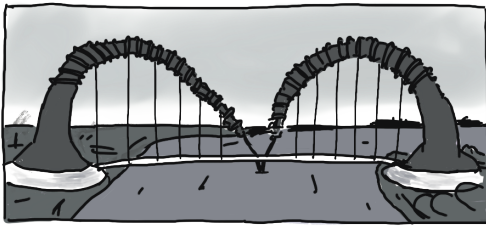
《Soft screw (ソフトスクリュー)》1976年

ジェミナIG.E.L.と制作したマルチプル作品。1969年に作られたスクリューの金型で実験を重ね、柔らかい素材で作られた。



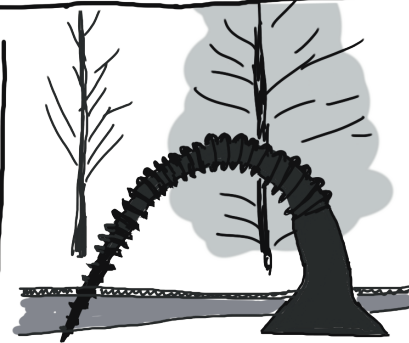
《Screw (スクリュー)》1969年

スクリューをデザインし、カリフォルニア州のガーデンのトップキンス・ツールिंग社で製作。このスクリューのデザインは、その後全ての立体的なスクリュー作品に使用された。



《Screwarch Bridge (スクリューアーチ橋)》1980年

オランダ、ロッテルダムのニューウエ・マース川に架ける新しい橋の提案。



《Screwarch (スクリューアーチ)》1982年

1983年にボイマンズ・ヴァン・ベニンゲン美術館で開催された「スクリューアーチ・プロジェクト」展に出品され、1984年に同館の庭園の池のそばに設置された。



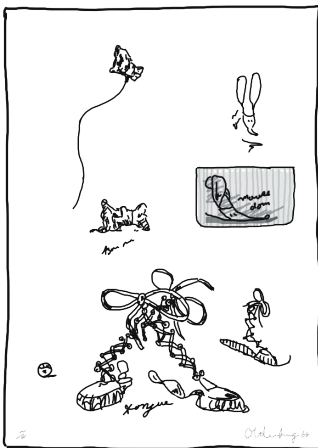
ワレス オルデンバーグの

# スクリュー、スニーカーいろいろ



《Giant gym shoes (巨大な運動靴)》1963年

ハイカットスニーカーを題材にした初期の立体作品。ワイヤーと石こうに浸したモスリンで形を作り、エナメル塗料で彩色。



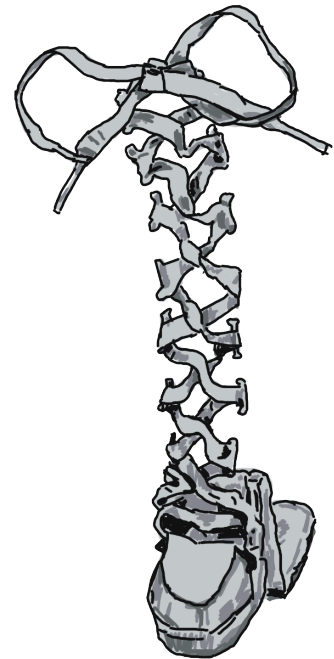
《Untitled (Sneaker lace) (無題 (スニーカーレース))》1968年

リトグラフの作品集「Notes」に収録。ハイカットのスニーカーが、ゴムつま先と舌、ヒモ(レース)と穴のみで構成されている。



《Sneaker lace in landscape - grey (風景の中のスニーカーレース-グレイ)》1991年

立体作品《スニーカーレース》とともに制作されたリトグラフ。ハイカットのスニーカーとヤシの木が合体した生き物のようにも見える。



《Sneaker lace (スニーカーレース)》1990年

ジェミナIG.E.L.と制作したマルチプル作品。オルデンバーグの作品は、人体の一部によくとえらるることから、自立するヒモに、背骨を重ねてみることでできるかもしれない。